

# 営農情報

第87号 令和元年9月6日



## 「あまおう」9月の管理

南筑後・久留米普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

### 10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

この資料は令和元年8月7日現在の登録資料に基づいて作成しています。農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

#### 【今後の管理のポイント】

★10月初旬で、最大葉（横）8.5cm程度の生育を目安に

- ・花芽分化確認後の適期定植
- ・2番花房分化促進のための寒冷紗被覆（早期作型）
- ・ハダニ類防除対策

8月28日の大雨の影響で、一部のほ場で苗や施設が浸冠水しました。今後も天気が不安定な予報であり、8月中旬からの長雨と日照不足もあり、苗の弱りや根傷み、定植床の準備が遅れ気味です。

病害虫では、ヨトウムシ類やアブラムシ類、ハダニ類の発生が見受けられます。また、「疫病」や「炭そ病」も散見されます。病害虫を本ばに持ち込まないように、発病株の早期発見・早期除去並びに防除の徹底に努めて下さい。

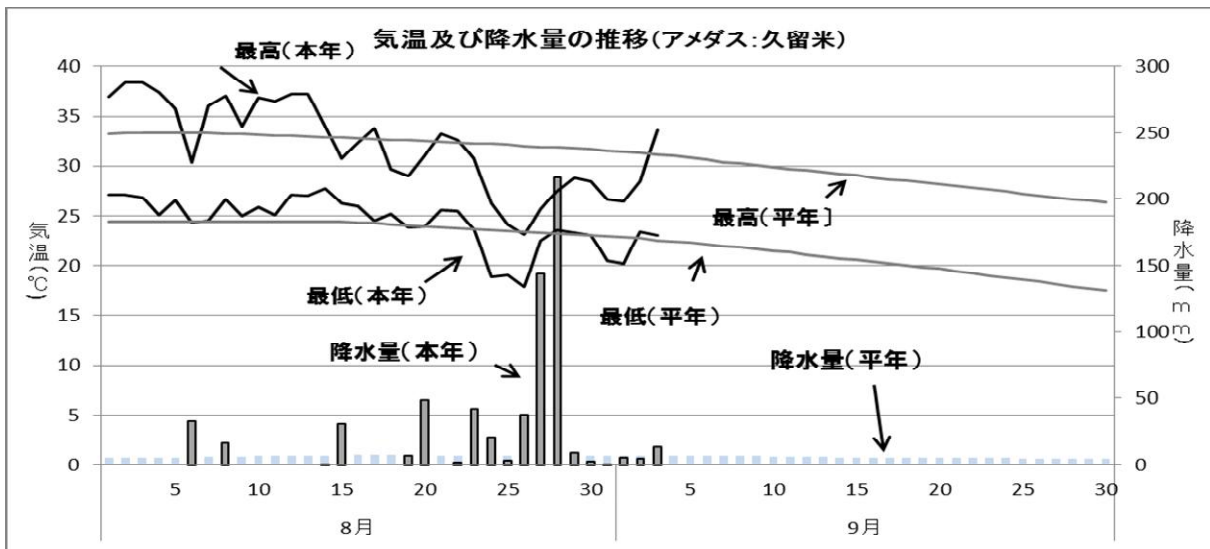


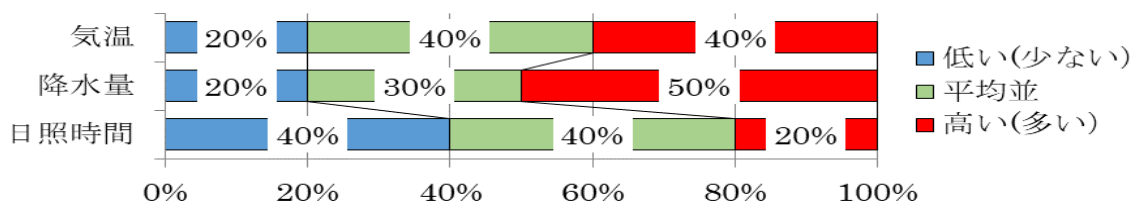
図1 気温及び降水量の推移（アメダス久留米より）

#### 気象予報と今後の見通し

##### 【気象予報】

福岡管区气象台が発表した1か月予報は次のようになっています。

- 1か月予報（九州北部地方 予報期間：8月31日～9月30日 発表日8月29日）



##### 【今後の見通し】

期間のはじめは日照時間の少ない状態が続く見込みです。気温は平年並か高く、降雨量は多くなる可能性が高い予報です。

## 育苗管理（普通ポット）

- 体内窒素が切れると、定植前に草勢が落ち込み早進株の発生が多くなりやすいので、生育状況を見ながら、既に肥料が切れているほ場では液肥で追肥を行う。
- 根張りが悪い（根傷み・根量不足）場合は、回復するまで葉面散布（OKF-1 1,000倍、メリット青500倍など）を2～3回行う。
- 窒素が切れすぎている苗には、苗の傷み防止のため寒冷紗被覆を行う。

## ほ場準備

- 畝たて後に冠水したほ場では、畝が十分に乾燥した後、溝上げし、畝上を耕運機で耕運、もしくは、定植箇所のみ中耕機でほぐして定植する。
- 畝たて前に冠水したほ場では、ほ場全体が十分に乾燥した後、トラクタにより耕運し、畝たてする。（半濁きの状態で耕運すると、生育不良の原因となるため、定植を遅らせて、ほ場が適湿状態になるまで待つ）

## 定植

- 早い作型ほど高温時の定植になるので、活着促進・根傷み防止のために、定植前に寒冷紗を被覆し地温を下げる。
- 条間は55cmを目安にし、狭くならないように注意する。
- 株間は、土耕栽培で25cm、高設栽培で20～23cmを目安にする。
- 定植前には必ず花芽検鏡を行い、最適な花芽分化ステージ（表1）になってから定植する。早い花芽分化ステージでの定植は、生育が旺盛になり出蕾の不揃いや乱形果の発生及び2番花房の分化の遅れの原因となる。特に、早期作型では厳守する。
- 深植えは、生育不良になりやすいため注意する。

表1. 定植日と花芽分化ステージの目安

定植日	花芽分化ステージ
9月10～14日	分化～ガク片形成
9月15～18日	分化～ガク片形成
9月19～22日	分化
9月23日～	肥厚後期

## 定植後から2番花房対策までの管理

### ◎早期作型（株が旺盛になりやすく、2番花房が遅れやすい）

- 寒冷紗被覆

#### 株づくりのため活着後寒冷紗を一旦剥ぐ

活着促進のため、定植から7日間程度被覆を行う（表2）。活着後は、株づくりのため一旦寒冷紗を剥ぎ、日光に当てる。

9月下旬～10月上旬頃に2番花房分化対策のため、寒冷紗を再被覆する。

#### 寒冷紗被覆の目安

1回目：定植前から活着まで（7日程度）

2回目：9月下旬頃から2番花房分化確認まで

- かん水

#### 2番花房対策に向けて徐々にかん水量を減らす（図2）

定植直後から活着までは畝が乾かないように充分かん水を行う。

活着後は、勢いをつけすぎないように徐々にかん水を控える。ただし、極端に乾燥させすぎると生育が遅れるので、土壤水分を見ながら適宜行う。

表2. 寒冷紗の種類と遮光率

種類	遮光率
シルバー寒冷紗109番	39%程度
黒寒冷紗600番	51%程度
黒寒冷紗610番	58%程度

● その他

追肥は、2番花房の花芽分化を確認してから行う。

マルチ被覆後は、地温抑制のためマルチの裾を畝の肩まで上げておく。

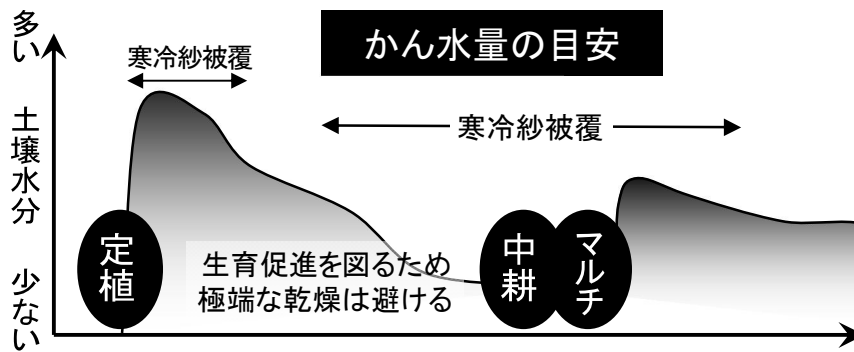


図2. 定植後のかん水管理（早期作型）

◎普通作型（2番花房が続きやすい）

充分なかん水等により生育促進に努め、2番花房対策は行わない

定植直後から活着までは畝が乾かないように充分かん水を行う。

活着後はかん水制限や寒冷紗被覆による生育制限は行わない。

活着不良などで生育が悪い場合は、葉面散布での施肥やマルチ・ビニル被覆時期を早めることなどで生育促進に努める。

病虫害防除

害虫は発生初期の防除、病害は発生前の予防散布が重要である。

定植後の薬剤散布は、苗が活着してから始める。

【炭そ病】【疫病】

- 発病した苗は育苗床から除去し、周辺の苗も罹病の可能性があるので、絶対に定植しない。
- 定植後も定期的な予防散布を徹底する。
- 定植後に発病株を確認した場合は速やかに除去し、予備苗による植え替えを行う。

【うどんこ病】

- 定植後からビニル被覆まで、定期的に予防散布を行う。
- 軟弱徒長気味に生育すると発病・拡大しやすくなる。寒冷紗を被覆した場合は、軟弱徒長しやすくなるため特に注意する。

【ハダニ類】

- 高温（25～30℃）ほど増殖力が高く、葉数が多くなれば薬剤がかかりにくくなるため、定植後の下葉除去後及びマルチ被覆直後は、しっかりと防除する。
- 天敵のチリカブリダニやミヤコカブリダニを使用する場合は、天敵に対して影響が長い農薬の使用を避ける。

【アブラムシ】

- ほ場周辺の雑草を除去する。
- 発生初期からの防除を徹底する。

## トピックス 「ヨトウムシ類に注意しましょう」

8月に入り、ヨトウムシ類の発生が見受けられるようになってきています。9月～10月はハスモンヨトウの多発時期となっています。防除のポイントを確認し、早期発見、早期防除に努めましょう。

### 【生態】

きわめて広食性であり、多くの農作物や雑草を食害します。発育のサイクルは、卵→1齢～6齢幼虫→蛹→成虫であり、幼虫期間は夏では15～20日です。雌成虫は3～6個の黄土色の卵塊を生み、一つの卵塊は数百粒の卵からなります。ふ化した幼虫は、産卵された葉を食害し、3齢以降になると分散を始めます。



図3. ハスモンヨトウの発育サイクル

### 【ハスモンヨトウの発生状況】

ハスモンヨトウの発生は、高温乾燥気味に推移する年は発生が早く、多くなります。7月までの発生状況は梅雨明けが遅かった影響もあり、平年よりやや少～並で推移しています(図4)。9～10月は多発時期となるため、ほ場での発生状況を確認しましょう。

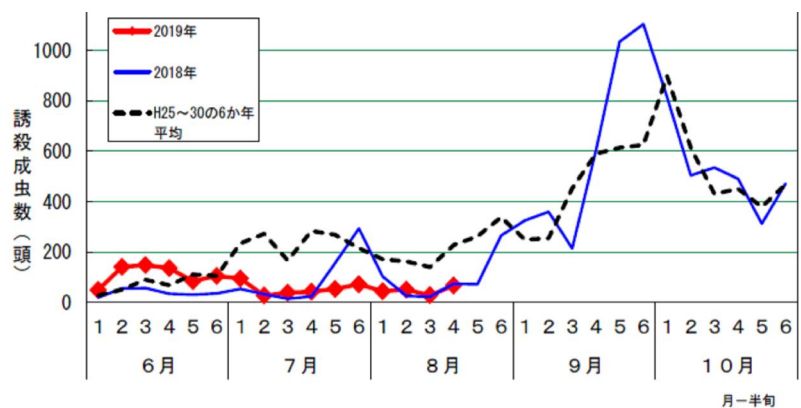


図4. フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺数の推移(福岡県病害虫防除所調べ)

### 【防除のポイント】

- 老齢幼虫になると薬剤感受性が低下するため、若齢時の早期発見に努め、防除する。
- 卵塊や分散前の幼虫は、寄生葉とともに摘み取り処分する。
- 広食性で寄主範囲が広いいため、ほ場周辺の除草を徹底する。

### 【定植前の薬剤処理】

ベリマークSCのかん注処理を行うことで、約3～4週間防除効果が持続します。定植前にかん注処理することで、多発時期の防除効果が期待されます。

薬剤名	倍数	使用回数	使用量	使用時期	備考
ベリマークSC	1000倍	1回	50ml/株	育苗期後半～定植当日	かん注処理

～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～

”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！